日本傳存の石渠閣補刻本『忠義水滸傳』發見の經緯

小松　謙
京都府立大學

今回の『中國文學報』には、京都大學文學研究科教授平田昌司氏が所有している石渠閣補刻本『水滸傳』について、書誌・本文・日本における流傳の三面から考察を加える論文が集められている。最初に、この本が發見され、平田氏の所有に歸するまでの經緯を述べておきたい。

ことは二〇一七年十一月、東京古典會の『古典籍展觀大入札會目錄』が京都府立大學の小松宛に送られてきたことに始まる。目錄を眺めていた小松は、その１０７９番に「忠義水滸傳　明刊　第一冊補配　一二冊」とあることに氣づいた。版面の寫眞を見ると、明刊とあるにもかかわらず、全く見たことがない版本であったため、他の版本の影印と對比するとともに、曲亭馬琴と『水滸傳』の關わりを中心に研究を進めている博士後期課程在籍中の大學院生孫琳淨氏にも意見を求めた。對比の結果、目錄に掲載されている第五回回頭部分の寫眞に「忠義水滸傳卷之五」とあることから、百回百卷本と判斷されるが、普通に知られている百卷百回本である容與堂本・四知館本とは明らかに版式が異なることが改めて確認された。そこで孫氏が回頭に「李卓吾評閲」とあることに注意を喚起し、百二十回本の封面には通常「卓吾評閲」とあるものの、百回本で「李卓吾評閲」と記されているのは石渠閣補刻本のみであると從來の研究で言われていることを指摘した。この書影は第五回であり、百回本か百二十回本であるかを確定することは困難に見えるが、百二十回本に分卷本は存在せず、一回一卷の形を取るのは百卷百回本のみである。更に孫氏は、目錄の寫眞をよく見ると、右側にあたる第四回末葉裏の版心に「閣補」の二字が見えることに氣づいた。これは版心に「石渠閣補」とあることを示唆するものである。石渠閣補刻本は影印本が公刊されておらず、目錄に掲載されている

寫眞と直接比較することはかなわなかったが（その後、二〇一八年十月より中國國家圖書館ホームページの「中華古籍資源庫」において中國國家圖書館藏本の全册の畫像が公開された）、これらの諸事實から、今回入札對象となっているこの本が石渠閣補刻本そのものである可能性が強まった。

これまでに中國國家圖書館所藏本が天下の孤本として知られてきたこの刊本が、日本で賣りに出るということは、にわかには信じがたい事實である。そこで、折から十一月十一日に東京で開催された東方學會秋季學術大會に參加した小松は、中國國家圖書館所藏の石渠閣補刻本を調査したことのある山梨大學教育學域准教授（當時。現在は東京大學東洋文化研究所准教授）の上原究一氏に意見を求めた。上原氏は、ともに中國國家圖書館所藏の石渠閣補刻本を調査した經驗がある東京大學人文社會系研究科を滿期退學して『水滸傳』をテーマに博士論文を執筆中であった（當時。現在は博士號を取得）荒木達雄氏にも連絡を取って確認を進め、小松に石渠閣補刻本に間違いないものと思われることを聯絡するとともに、この極めて重要な版本が、投資目的の人物の手に落ちて死藏された場合、『水滸傳』研究において大きな損失となるという懸念を表明して、何とか調査可能な場に留めるべく奔走を開始した。

十一月十九・二十日の入札に先立ち、十七・十八兩日に東京古書會館で入札對象書籍の展觀があり、上原氏はその時期にたまたま臺灣出張があって參加できないため、小松が十一月十八日に展觀に赴いた。小松は價格の高騰を避けるため、目立たぬよう注意しつつ、問題の『水滸傳』について、確かに明刊と思われること、第三回以降には缺落がないことを確認するとともに、上原氏から依頼のあった數點の書籍についても確認を行って上原氏に報告した。

購入のため奔走していた上原氏からこのことを聞いた京都大學大學院人間・環境學研究科博士後期課程在籍中の中原理惠氏は、せっかく新たに世に出た貴重な文獻が再び失われることを危惧し、この本が極めて貴重なものであること、失われると學術上大きな損失になることを文學研究科の平田昌司氏に訴えたところ、平田氏は自身で入札に參加することを決斷し、無事落札することができた（なお、上

原氏はこの入札會において、１０７５番『三國志通俗演義』巻五〔周曰校丙本〕と１０７８番『出像西遊記』巻十七〔熊雲濱覆世德堂刊本〕を自身で落札した）。

本が屆いた後、十二月四日に上原・孫兩氏と小松は閲覧のため平田氏の研究室を訪問した。平田氏からこの場で貸し出してもよいという申し出を受けた三人は、京都府立大學文學部の小松研究室に石渠閣補刻本を運び、文獻の寫眞撮影に熟練した上原氏が持參した機材でただちに撮影を開始、その日のうちに全葉の撮影を完了した。

以上が石渠閣補刻本發見の經緯である。先に述べたように、石渠閣補刻本は他に中國國家圖書館に一部が所藏されるのみであり①、しかも、本誌所收の小松論文で述べているように、從來最善のテキストとされてきた容與堂本に先行する本文を持つ可能性を指摘されながら、さまざまな事情により、多くの毀譽褒貶にさらされてきた問題の刊本であった。その本を詳細に調査し、眞價を明らかにすることは、『水滸傳』研究において極めて重要な意義を持つ。また、孫論文で論じられているように、このテキストは曲亭馬琴と關わりがあった可能性が高く、實は日本文學研究においても重要な意味を持つ可能性を有する。

發見に關わった者たちが、この機會を與えられたことに感謝しつつ、全力で解明に取り組んだ結果が、本誌に掲載されている三本の論文である。

註

① 吳曉鈴「答客三難」（『光明日報』一九八四年二月七日。ここでは『吳曉鈴集』（河北教育出版社二〇〇六）第一巻二十七頁に據る）注③に「余曾見美國芝加哥大學東亞圖書館藏本、版刻較佳、今所知海內外僅此二本（私はアメリカのシカゴ大學東亞圖書館藏本を見たことがある。刊刻の狀態はかなり良好なものであった。今國內外を問わず、知る限り現存するのはこの二本のみである）とある。この記述について、馬幼垣氏は「所謂天都外臣序本《水滸傳》尚未發現第二套存本」（『水滸二論』〔三聯書店二〇〇七〕四〇九・四一〇頁）において、シカゴ大學にはそのような本は見つからず、中國國家圖書館藏本のマイクロフィルムがあるだけであるとしている。眞相は不明だが、現存を確認しうるものとしては、平田氏藏本を除けば、中國國家圖書館藏本が唯一のものであることは確かである。また、今回世に出た本がシカゴ大學にあったものと同一である可能性も絶無ではないが、平田氏藏本には一

部に返り點が附されているため、日本傳存のものであることは間違いない。上原・荒木論文で觸れているように平田氏藏本には藏書印が捺されておらず、藏書票の剝離痕や請求記號の書き入れなどといった圖書館の藏書であった痕跡は全く見出せない。馬幼垣氏の調査結果を踏まえても、これが一時期シカゴ大學に所藏されていたものである可能性は極めて低いものと考えられる。